論文の和文要旨

＜論文題目＞

ドストエフスキー文学にみる内在性と超越性：
ミハイル・バフチンのポリフォニー論と小林秀雄の洞察の実存論の比較研究

＜氏名＞

千葉　雄

（1）本論文の目的は、今日かなり普遍的な支持を得ているように見えるミハイル・バフチン（Михаил Михайлович Бахтин, 1895-1975）のドストエフスキー理解の核心にあるポリフォニー論を、一時代の日本においてきわめて大きな影響を持ち、批評行為の範型のごとく奇妙なカノンとなっていた小林秀雄（1902-1983）のドストエフスキー論とをあえて突き合わせ、両者をあらためて比較検討することで、ドストエフスキー文学のひとつの解釈の可能性を模索することにある。

　一般的にもバフチンの議論は、ロシアだけにとどまらず、世界各地のドストエフスキー研究を大きく変えていったが、それゆえにその変容はドストエフスキー研究の一種のパラダイム転換であったと断じていい。バフチンにとって、ポリフォニー（多声性）の概念が、ドストエフスキー文学を特徴づけている中心的な契機である。ポリフォニーとは、主人公の自己意識と他者のそれぞれの自己意識が交錯したり、競合したり、結合したりする生の実践的地平を含意している。小説の登場人物（主人公）たちがこのように相互にポリフォニーを奏でるだけでなく、その対話に作者のドストエフスキー自身が入り込み、主人公たちとの対話的な関係を作り上げるのである。

　日本の昭和の評論家である小林秀雄は、主人公であるラスコーリニコフやムイシュキンの自意識の問題を作者の血肉の問題、つまり実存のせっぱ詰まった問題として掘り下げていった。小林の想定する作者と主人公の関係性は、そこに対話を読み込むバフチンとは対照的に、モノローグ的な同化の関係である。バフチンがドストエフスキー文学に「対話」を読

み込んでいるとしたら、小林は「モノローグ」をその文学に読み込んでいる。

本論文で明らかにしたいことは、ドストエフスキー文学のテクストの分析的な解明ではない。原文を読めなかった小林秀雄のドストエフスキーへの取り組みから厳密な読解を期待することは不可能である。また、批評家である小林の場合、色濃く小林秀雄という人間の匂いがその批評に立ち込めている。本論文で明らかにしたいのは、ドストエフスキーに取り組む上での両者の精神の態度である。その意味で、両者がドストエフスキーから何を受容したかということを問いたいのである。しかし、そこからかえって、ドストエフスキー文学というものが、何を人々に訴えかけているのか、世界に対して人間のどういった問題を提示しているのか、ということが浮かび上がってくるのではないだろうか。

バフチンは、ドストエフスキー論において、図式的なまでにモノローグとダイアローグという対抗的な関係を強調した。その戦略により、モノローグを論じることにより対話に基づくドストエフスキー文学の特徴が明らかになり、ポリフォニー的な対話を論じることによりモノローグの性質が逆に際立つようになった。これこそがまさに、バフチンがポリフォニー論で論じた互いにリフレクトし合う対話であろう。本論文では、この戦略を借りようと思う。つまり、バフチンの対話を論じることにより、小林のモノローグの性質が炙り出され、そこから小林を論じることにより、バフチンのポリフォニー論の性質が逆照射されることを期待するのである。

（2）第一部では、「モノローグ」と「対話」というバフチンのポリフォニー論で対照されている二つのキー概念を提示しながら、バフチンのドストエフスキー論の特徴を検証した。バフチンによれば、ドストエフスキーは、従来の自然主義小説やロマン主義小説などのモノローグ小説とは一線を画す画期的なポリフォニー小説という文学ジャンルを生み出した。そして、バフチンは、従来の小説から分かつドストエフスキー文学の特徴を作者の徹底的な「対話」による創作方法に見ている。モノローグ小説は、作者の単一の視野から構築される。その視野からそれぞれの素材や主人公の声が作品として統一されるのであり、その単一の視野からそれぞれの異なった素材や声が意味づけられる。そこでは「個人の文体や語調の同一性、単一の世界と単一の意識の同一性に支配されてしまっている」ため、「素材の質的差異の問題は小説の構成自体には反映されていない」。これに対して対話の原理に基づくポリフォニー小説の場合、それぞれの素材は十分にその質的差異が作品の構成に反映される。それぞれの素材は、それぞれの内的原理を持った異物性＝他者性が保持されながら、そのうえで統合されるのであり、モノローグ小説のシステムとは決定的に異なっている。あくまでも異質な素材同士が独自の原理や価値観を持ちながら、対話的な相互関係を結び合うのである。モノローグ小説のような単一の視野にすべてが関連づけられるのではなく、それぞれの世界、それぞれ自立した視野を持った様々な意識同士が、いわば第二次的なレベルにおけるポリフォニーによる高度な統一を得るのである。

第二部では、小林秀雄のドストエフスキー論の特質と問題点を検討するが、第一部で見た

バフチンとの比較の観点から取り上げてみた。バフチンがドストエフスキーの小説に徹底された「対話」を見るのとは対照的に、小林はバフチンの論じる「モノローグ」が徹底させたものをドストエフスキー文学に読み取っている。

両者を単純に類型化すれば、「声」によるバフチンと「眼」による小林ということになる。バフチンの「声」には、どんな人間も対等に対話に参加する水平的なつながりをもたらすものであるという認識がある。それに対して、小林の眼には、同じ眼識を持った人間同士にしか本質的に分かり合うことができないという人間の孤独が内包している。そこには、言語や理性によっては人間の間を容易に架橋できない人間の真実があり、その真実を見てしまった者同士では時空を超えて分かり合えるという認識がある。また、水平的な対等な関係を生み出すバフチンの「声」に対して、小林の「眼」には見る人間の特権性がある。真理は見える人には見えるが見ない人には見えないものであり、特権的な眼を持った者には見えるものである。それは、それぞれの声を持った対等な対話の中から真理が浮かび上がってくると考えるバフチンと著しい違いがある。

そのように両者異なるものを批評しながら、両者ともに従来の小説からドストエフスキーの小説が超え出る地点を見出し、従来のドストエフスキー読解にあったモノローグ性から抜け出している。バフチンは、作者の対象である主人公の作者に支配されない自立した声を論じることによって、従来のモノローグ小説を超え出る地点をドストエフスキー文学に見出している。作者の対象である登場人物の「声」を想定することにより、作者が主人公に課すあらゆるイメージやキャラクター像を解体してしまうのである。そこから主人公は自立した主体として立ち現れる。小林のドストエフスキー理解は、モノローグを徹底させることによって、バフチンや小林の時代に広く見られたシェストフやE・H・カーなどによる「モノローグ的」なドストエフスキー理解と一線を画すものとなった。小林によれば、作者と主人公が同化し、作者の透徹した意識が主人公に付与されることにより、その主観からモノローグ小説にあった作品を構成するあらゆる因果律を解体させてしまうのである。それは、作者が主人公に設定した生得的因果や環境による因果をも解体してしまう。そこから主人公は自立的な存在となる。

このような両者のドストエフスキー文学から読み込むものの違いは、異なる批評を生み出している。

まず、両者が主人公に想定する声というものが異なる。バフチンの批評する声は、登場人物であろうが、語り手であろうが、作者であろうが、誰もが参加する水平的な対話における多声的な声である。対話するそれぞれの主体同士の間から作品の真実や登場人物たちの真実が浮かび上がってくる。一方、小林の想定する声とは、戦後の『罪と罰』論で批評されるように、形而上学的な領域から垂直的に人間に降り注ぐ「デモン」（ソクラテスのダイモニオン）である。この超越的な声との接点において、主人公は世界や自己の真実を見出そうとする姿勢が生まれるのである。

また、小林の批評する場面は、バフチンがドストエフスキー文学から読み込んだ、多声的

な対話の声が消失する地点である。『罪と罰』の主人公の独白的な心理描写であっても、対話的な場面を批評するバフチンと対話の成り立たない「断絶」の場面を批評する小林との違いがある。本論文では、バフチンの「声」というものがミュートになる局面を、小林はドストエフスキー文学に読み込んでいることを論じた。『罪と罰』や『白痴』において力を込めて小林が批評する「主調低音」とは、どれもバフチンの批評した多声的な声がミュートとなる「断絶」とも言える局面である。

（3）終章では、本論文のタイトルにある「内在性と超越性」に関する説明を行なった。小林の批評は、バフチンのアプローチにはない知見と眼識をいくつか持っている。小林のアプローチは、ドストエフスキーの小説における垂直的なデモンの「声」や「断絶」などに着目し、その垂直軸の形而上学的次元の存在を示唆しているという意味で、もっぱら主人公たちによる対等な水平軸の対話を批評するバフチンのポリフォニー論に対して、一つのコントラストが見られる。ここに、ドストエフスキー文学が従来の主体と対象の関係がきっちりとしていたモノローグ小説を超え出る地点を、地上の水平的な声による対話の連鎖に置くという意味で内在性に見るバフチンと、形而上学的な領域や声の鳴り止む断絶に置くという意味で超越性に読み取る小林という対比を示そうとした。そのため、バフチンの「内在性」に対して小林の「超越性」という位置づけを与えた。この両者が読み取るドストエフスキー文学における位相の違いは、人々の対話的側面を強調するバフチンと、鋭い眼識でその対話が成立しない声がミュートになる「断絶」を見る小林とのコントラストを生み出す。

小林のドストエフスキーから読み取る「断絶」や「超越性」は、対話の連鎖を読み込むバフチンの読解からは導き出せないものであり、バフチンの対話理論の盲点をついているということを本論文では提示する。ポストモダン的な解釈に立つ柄谷行人らの小林への批判は、超越的なものや本質主義的なものに対するものである。本論文では、この批判の重要性を十分に認める。しかしまた同時に、本論文においては、小林秀雄のドストエフスキー論のなかに、ポストモダン的な解釈以後の批評や解釈が持つ「超越的なもの」や「本質的なもの」に対する断念や冷やかさに対する違和感に、一定の説明を与えるための手掛かりがあるのではないかと考えた。また、小林のドストエフスキー論のなかにある一つの視座を取り戻すことによって、バフチン的な、あるいはコミュニケーション論的な読解の平板さに対して奥行きを見出すこともできるのではないかと考えた。この点についての考察が本論文の骨子である。